

古写経の流転—舎人国足願経『瑜伽師地論』卷第四十四—

教授 宮崎 健司
(日本古代史)

今日、わが国に多くの古写経が伝えられている。古いものでは奈良時代あるいはそれ以前に遡り 1300 年を超えて伝えられたことになる。しかし、これらがどのように伝えられたかを知らぬ例は多くない。ただその片鱗をみせるものもある。

本稿では、その一例として、近年、大谷大学博物館に収蔵された舎人国足願経『瑜伽師地論』卷第四十四（以下「本巻」）を紹介し、その流転の一端をうかがってみたい。

舎人国足願経は全 100 巻におよぶ『瑜伽師地論』の古写経で、次の奥書をもつ。

天平十六年歳次甲申三月十五日
讃岐国山田郡舎人国足

奥書に若干の異同はあるものの、これにより天平 16 (744) 年讃岐国山田郡、現在の香川県高松市東部周辺に住した舎人国足の発願により書写されたと考えられている。奈良時代の多くの写経がおおむね平城京および畿内周辺の例であるなか、地方、特に四国における写経の事例として注目されるものである。

まず本巻の書誌情報を示そう。黄穀紙（黄蘗染めの楮紙）16 紙に書写され、紙高は縦 23.7 糎、全長 886.4 糎、卷子装になっている。各紙はおおむね 56 糎前後で 17 字詰め 30 行で写される。なお天地とくに下端が 2 糎強断

裁されたことが後述の印記状況から推定される。

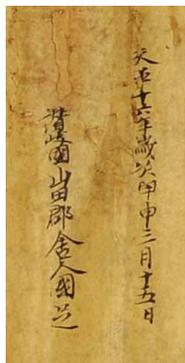
奥書以外にも墨書がみられるほか、卷子装ながら、よくみると等間隔の折跡がみられ、折本改装後、さらに巻子に再改装されたものといえる。

さて、本巻の流転について注目されるのは印記と白点である。印記として第 1 紙右端の下方に陽刻黒方印「石山寺一切経」がみられる（ただし「経」部分が断裁のため欠ける）。また見過ごしやすいが、よく観察すると各紙に白書のフコト点およびカナがあることがわかる。この情報をもとに本巻の流転をさぐることになろう。

すでに読者は陽刻黒方印「石山寺一切経」の存在より本巻が著名な石山寺一切経の一具であることがおわかりであろう。石山寺一切経は、久安 4 (1148) 年念西の発願にはじまり、朗澄 (1132 ~ 1209) により鎌倉時代初期に完成をみたもので、重要文化財に指定されている。現在、奈良時代から室町時代に写されたものが含まれ、新写のみではなく古写経によっても補われた。そのうち奈良時代から平安時代の古写経の大部分が念西の蒐集によるものとされ、本巻もその一つということになる。つまり、奈良時代、8 世紀に讃岐国で写されたのち、平安時代後期、12 世紀には近江国に伝えられたことになる。のち天明 7 (1787) 年に尊賢 (1749 ~ 1829) による修補



黒方印



奥書

で折本に改装されたが、この改装が先に示した本巻の折目の原因である。現在、石山寺に伝存するものは折本として伝わるので、本巻は折本改装後に石山寺から流出し、再度、卷子にもどされたものといえよう。

次に本巻が石山寺一切経の一具になる以前の状況を考える上で重要な手がかりが白点である。白点は、平安時代初期、9世紀後半の加点とされ、その内容から南都の諸寺、とりわけ東大寺周辺と関係深いと考えられている。これによって、本巻が写されたおおよそ100年後には大和国へ移動していたことが推定されるが、その経緯は不明とせざるをえない。しかし、本巻が南都諸寺のどこに関わっていたのか若干の手がかりがある。

本巻の僚巻『瑜伽師地論』巻第四十二、巻第八十五が、現在、天理図書館に所蔵されている。そのうち巻第四十二に陽刻重郭朱円印「元興寺印」が捺され、巻第四十二が一時、元興寺にあったことがわかる。本巻には当該印は捺されないものの、巻第四十二と同筆と思われ、他の例から必ずしもすべての経巻に押印されたとも限らないので、本巻も元興寺にあった可能性と推定したい。

ところで「元興寺印」を押印する著名な仏典にはいわゆる「元興寺経」がある。これは天平12(740)年3月13日付の願文をもつ藤原北夫人発願一切経、聖武天皇の夫人の一人であった北家・藤原房前の娘が亡父の追善と母の平安を祈念し発願したもので、藤原北家の写経施設で写されたものである。のち元興寺に移されて「元興寺北宅一切経」などと呼ばれ、当該印の押印もその傍証の一つとされる。ということは、本巻は奈良時代、8世紀のうちに元興寺に所蔵された可能性がある。ただし当該印を押印したもののうち、石山寺一切経の平安時代初期書写の『妙法蓮華経玄賛』巻第三が存在しているため、その時期は平安時代初期まで下げる必要がある。

以上、奈良時代、8世紀半ばに讃岐国で写された本巻は、平安時代初期、9世紀頃までには南都周辺に伝わり、一時は元興寺に所蔵されていた。その後、平安時代後期、12世紀中頃に念西により石山寺一切経の一具とされたのである。ただし、当時、石山寺に本巻があったのか、あるいは念西により近江国に持ち込まれたかは明らかでない。また、折本の痕跡から折本改装の18世紀後半までは石山寺にあったことも確認できよう。その後、巷間にながれ、いくつかの蒐集家の手を経て大谷大学博物館に収蔵されるに至ったといえる。

さて、石山寺一切経に古写経が入れた経緯は明らかではないが、古写経転用の例はこれより少し前の法隆寺一切経にもみられる。そこでは、書写時期全般にわたって関わった静因により古写経が転用されたと考えられる。このように同時期の静因、念西がどのようにして古写経を蒐集したのか、また、そこに関わりはあったのか。さらにいえば、平安時代後期という一切経書写が盛行する時期に、例えば、古写経の所在をめぐる情報のネットワークのようなものがあったのか、各一切経事業に相互関係はなかったのか、など興味は尽きない。この点をさぐっていけば、当該期の一切経書写をめぐるさまざまな状況が見えてくるのではないかと憶説するが、ひとまず本巻の紹介のみで擱筆としたい。

いずれにしても本巻は1270年を超える流転の歴史を今日に伝える、かけがえのない存在なのである。